

石原さとみ主演ドラマ
「アンナチュラル」
スタートで話題!



「法医解剖医」の世界

全国にわずか170人しかいない

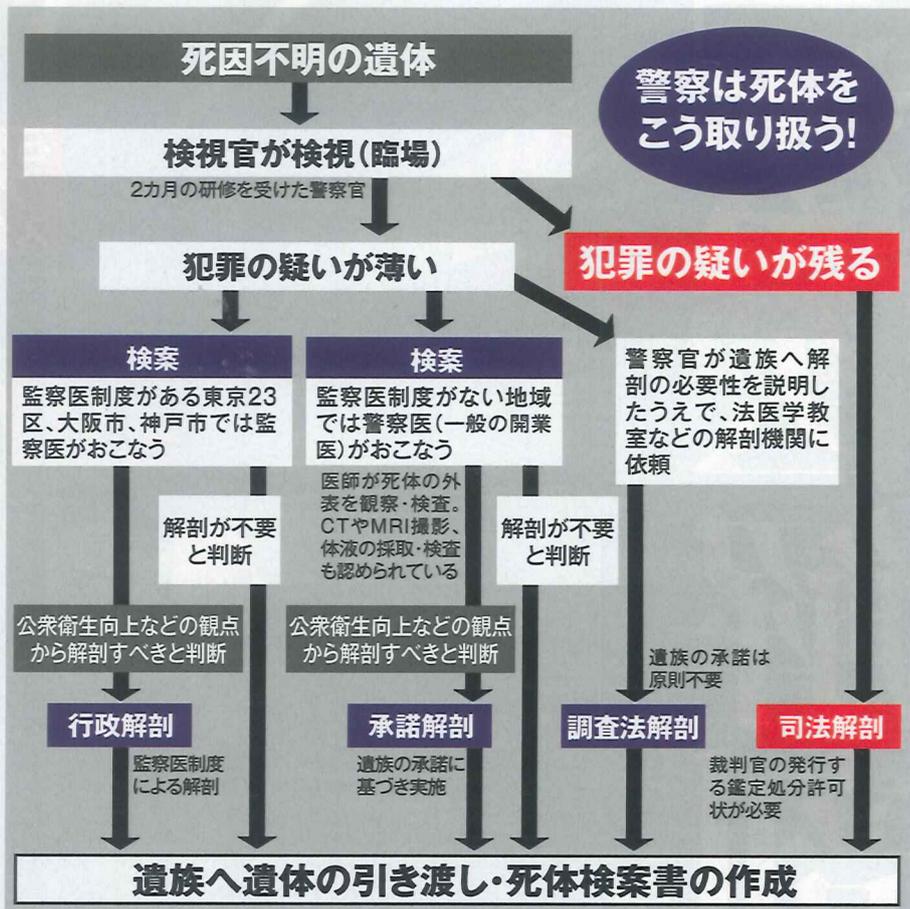
「不自然な死は許さない」。今月始まった連続テレビドラマ「アンナチュラル」(TBS系)。石原さとみが演じるのが、遺体を解剖し、死因を究明する専門家・法医解剖医だ。死体と語り合う、知られざる職業の実態に迫る。

解剖室へと続く廊下に置かれた棺の前に立つ岩瀬博太郎教授

生きている人間も診察する
 法医学解剖医は遺体のみを診るわけではない。虐待の疑いのある子供など、児童相談所からの依頼で生体診察をおこなうこともある。年々増加傾向にある、重要な任務だ

依頼がないと解剖できない
 法医学解剖医の任務はあくまでも死因を明らかにすること。警察などの公的な機関からの依頼のみで解剖はおこなわれ、法医学者の判断による解剖はほとんどおこなわれない

CTスキャンは限界がある
 CTスキャンでは20割程度は死因を示唆する所見が得られる。だが、たとえばCTスキャンによって死因が「脳出血」と判明してもそれが「覚醒剤中毒」に起因する脳出血だと判定するには、解剖とそれに続く薬物検査が必要だ



警察は死体をこう取り扱う!



危険ドラッグなどの薬毒物の分子量を測定する機器。1台5千万円で、24時間稼働。新しい構造の化学式も見破る



遺体から取り出した臓器片が入ったカセットを、機器で振り動かす。上の臓器片を薄く切り、染色すると肺炎や心筋梗塞などが診断可能に

「アンナチュラル」のようなドラマで、司法解剖などをおこなう法医学者という職業や仕事内容に注目が集まるのは、たいへんありがたいですね」
 そう語るのは、千葉大学大学院の岩瀬博太郎教授だ。ドラマでは石原さとみが「不自然死究明研究所」(架空の研究所)の医師を演じたが、岩瀬教授も法医学解剖医(法医学者)として、遺体の本当の死因を解剖によって明らかにしてきた。岩瀬教授は、法医学解剖の現状について、「問題だらけだ」と指摘する。

警察に届けられるのは11割、解剖されるのは1割

岩瀬教授によると、法医学解剖の現場は完全な人手不足。日本では大学院生を入れても法医学解剖医は全国で170人しかいない。ちなみに、岩瀬教授の担当する千葉大学と東京大学には院生を含め計9名が所属。日本では多いほうだ。「この9人にスタッフを加えた二十数名で、年間500体以上(東大と千葉大を合わせた数)の遺体を法医学解剖するので。週5日、1日平均2体の解剖を実施していることになりました」

解剖に要する時間は平均して1体3時間程度。依頼者は、警察、海上保安庁、自衛隊、検察庁などだ。

取材当日に解剖されていたのは、海上保安庁より依頼された水中死体だ。遺体の胸部、腹部だけでなく、頭部や頸部までメスで切り開かれ、内臓が取り出されていく。

「水中死体といっても、溺死とは限り

死因はこうして明らかになる

法医学解剖ではあらゆる可能性を考慮して全身を解剖し、骨や血液を使った薬物検査やDNA検査などをおこなう。映画やドラマのように、解剖結果だけで死因を特定してしまう「名医」は存在しない

兵庫34割、広島1割… 解剖率に大きな差

解剖率には人口や死亡者数で地域ごとに大きな差がある。兵庫県では34割、沖縄県では29割の遺体が法医学解剖されるが、広島県では1.3割、大分県では2割しか解剖されていない

「法医解剖医」の世界に メスを入れる10の秘密

慢性的な人手不足… 鑑定書を書くヒマがない！

解剖の結果は鑑定書にまとめるのが原則だが、県によっては多くの事例で鑑定書が作成されていない。鑑定書作成を補助する人手がないため、裁判にならない解剖は、鑑定書が作成されない場合が多いのだ

多くの地域では開業医が 検案している

多くの地域では、警察の依頼を受けた開業医が遺体外表の検案のみをおこなう。解剖されないまま心不全とされる 경우가多く、法医解剖の結果「腹を蹴られるなどして、内臓破裂で死亡」と判明した例もあった

一般人が依頼しても 解剖してくれる？

法医解剖は一般人からの依頼は受け付けていない。ただ「警察や医師から下された死因に納得がいかない遺族が、個人的に大学に解剖を依頼してくる例はある。なかなか受けられませんが…」(岩瀬教授、以下同)

テレビドラマのことがへん

「ドラマでは、法医解剖医は事件を説明したり、格好よく描かれるけど、03年に千葉大に赴任したら、解剖に台所にあるような出刃包丁とまな板を使っていた(笑)。東大の設備も貧相だし、華やかさとはほど遠いですよ」

給料は業界でもかなり安いが…

給料は医師のなかでは「トップレベルに安い」。解剖にあたって「1体5万〜8万円」の謝金が出るが、千葉大と東大では個人が受け取ることはない。「それでも、社会貢献を真面目に考えている人が志望してくれます。若手のためにポストを増やすことが急務です」

ません。本当の死因を特定するためには、徹底的に調べなければならぬのです」

解剖現場でそこまで奮闘しても、本当の死因が特定される遺体の数はまだまだ少ないと岩瀬教授は語る。

「日本では毎年約130万人が亡くなり、そのうち警察に届けられる遺体は17万体制あります。このほとんどは、開業医が外表だけの検査やCTスキャンのみをおこない、死体検案書を書いて処理します。17万人のうち解剖されるのは11割。法医学の専門家が解剖することはほとんどないのです」

その結果、不自然な「心不全」や「心筋梗塞」が死因として多用されると岩瀬教授は警鐘を鳴らす。

「警察が事件性を疑わない限り、我々にも解剖の依頼は来ないので、死因を調べることもすらできないのが現状です。死因が闇に葬られた事件は、まだ無数にあるはずだと確信しています」

次のページでは法医解剖医による司法解剖で死因が特定された実際の重大事件を紹介したい。

千葉大学大学院教授 岩瀬博太郎氏



いわせひろたろう '67年生まれ 千葉県出身 法医解剖医 東京大学医学部卒業。同大法医学教室を経て、'03年より千葉大学教授、'14年より東京大学教授を兼務。日本法医学会理事

早期に法医解剖されていけば防げた事件も……

「法医学」の重大事件10

破損した車を放置。解剖はおこなわれたと主張

保土ヶ谷事件

'97年、破損した車中で自営業男性が嘔吐、昏倒。警察は酒に酔っていると放置し、約半日後に死亡した。司法解剖の結果、心筋梗塞だったと説明されたが、遺体に解剖の跡はなかった。遺族は訴訟を起こし、救護義務違反は認められたが、放置と死亡に因果関係はなく、解剖もおこなわれたとの判決だった。

包丁が刺さっていたのに「自殺」と処理

福岡スナックママ連続保険金殺人事件

'04年、不倫相手への脅迫容疑で元スナックママ、高橋裕子が逮捕され、取調べの過程で保険金目当てで'94年に2番めの夫を刺殺、'00年に3番めの夫を水死させていたことが発覚。最初の事件は腹に包丁が刺さっていたにもかかわらず司法解剖されず、自殺と処理された。無期懲役に服役中。

4人が「事故死、や」自殺、と処理された

鳥取連続不審死事件

'09年、元スナックホステスの上田美由紀が詐欺容疑で逮捕され、周辺で6人の男性の不審死が発覚。'09年、司法解剖で睡眠導入剤が検出された2人の殺害罪で起訴された。ほかの4件の事件は不起訴に。日本には臓器や血液を保存しておく制度がなく、本当の死因は不明のまま。'17年、死刑が確定。



上田美由紀死刑囚

20年間なんの手も打たれなかった

パロマ湯沸かし器死亡事故

'85年から20年間、パロマ製ガス湯沸かし器の動作不良が原因の一酸化炭素中毒事故が28件発生、21名が死亡。'96年の東京都港区での死亡者は監察医が一酸化炭素中毒死としたものの、警察は遺族に伝えず、病死として処理。10年後に遺族がそのことを知って訴訟を起こし、事故が発覚した。

女の周囲で相次いだ一酸化炭素中毒

首都圏連続不審死事件

'09年、婚活サイトで知り合った男性3人を練炭自殺と偽装し、殺害した木嶋佳苗が逮捕、起訴された。最初の事件では司法解剖はおこなわれず、次の事件では司法解剖がおこなわれ睡眠導入剤が検出されたものの、事件性なしと処理された。周辺でほかにも3件の不審死もあった。'17年、死刑が確定した。



木嶋佳苗死刑囚

夫らに青酸を盛った「リアル後妻業」の女、

青酸連続不審死事件

'13年、寛千佐子の4番めの夫、勇夫さんが不審死。司法解剖で青酸化合物が検出され、ほかにも元夫、交際相手ら計8人が変死していたことが発覚した。だが、司法解剖はそのうち2人しかおこなわれなかった。3件の殺人罪と1件の強盗殺人未遂罪で起訴され、'17年11月の一番では、死刑が言い渡された。



寛被告の京都府向日市の自宅

法医解剖医の執念が殺人を立証した

トリカブト保険金殺人事件

'86年5月、石垣島で女性が急死。行政解剖で死因は急性心筋梗塞とされたが、医師が心臓と血液を保存。その後、夫が多額の生命保険をかけていたことが発覚した。保存検体からトリカブト毒が検出され、夫は無期懲役に。前々妻、前妻も心不全などで急死しており、前妻にも保険がかけられていた。



トリカブトの花

靴下が脱がされていても解剖されず

中標津町高校生オートバイ変死事件

'99年、道路脇に転落、死亡している高校生が発見された。そばに盗難オートバイがあり、警察は単独交通事故死と判断、司法解剖はおこなわれなかった。だが、軍手、靴、靴下が不自然に脱がされているなど不審な点が多く、遺族は傷害致死事件として告訴したが、認められなかった。

遺族の訴えで一転…角界が揺れた

時津風部屋力士暴行死事件

'07年6月に時津風部屋の序ノ口力士が稽古中に心肺停止、搬送先の病院で死亡。病院は死因を急性心不全、警察は虚血性心疾患と発表したが、両親が地元の新潟大学医学部で公費承諾解剖を依頼すると、死因は親方がビール瓶で額を殴るなどしたリンチ、暴行によるものと判明した。

防げなかった2件めの事件

老人ホーム睡眠導入剤混入事件

'17年、千葉県印西市の老人ホームに勤務する准看護師が殺人未遂容疑で逮捕された。同僚に睡眠導入剤入りのお茶を飲ませ、交通事故を起こさせて殺害しようとした疑いだったが、2月の同僚の交通事故死と処理された事件も彼女の犯行と発覚。この事件でも司法解剖はおこなわれていない。

れているのだ。

「アンナチュル」の「不自然死究明研究所」は、現実でも切実に求めら

「以前、法医学研究所構想がありましたが、立ち消えになってしまった。国として、捜査機関とは別の機関で、専門家が責任をもって死因究明をおこなう制度を整えるべきです」(同前)

「20年以上前から、現状の制度では犯罪が繰り返されると指摘してきていますが、国は放置したままなんです」
ジャーナリストの柳原三佳氏は語る。
実際、上のように、最初の事件で適切な検案・解剖がおこなわれず、連続殺人などにつながったケースが驚くほど多い。検視官らの臨場率(事件性の有無を判断する現場立ち合い率)は全国平均で10年間で11・2割から78・2割と飛躍的に上がったが、解剖率は94割から12・7割とほぼ横ばいだ。
「昨年の老人ホーム睡眠導入剤混入事件では当初、交通事故死として処理されました。臨場の際、睡眠導入剤を飲まされたとは思わなかったんですよ。臨場が機能していないのです」(同前)



フィンランドでは異常死の解剖率はほぼ100%。血液や胃内容物などは一定期間、冷凍保管される。日本では保管のルールも予算もない
写真提供・柳原三佳氏